

氏 名 江戸 聖一郎  
学位の種類 博士(音楽)  
学位記番号 甲第19号  
学位授与年月日 平成27年3月23日  
論文題目 フランソワ・ドゥヴィエンヌのアーティキュレーションの技法  
—フルート協奏曲におけるレトリック的表現—

学位論文等審査委員

<リサイタル審査>

主 査	教 授	大嶋 義実
副 査	准教授	上野 真
副 査	教 授	柿沼 敏江

<論文審査>

主 査	教 授	大嶋 義実
副 査	准教授	上野 真
副 査	教 授	柿沼 敏江

# 論文要旨

本稿は18世紀末に活躍したフルート奏者、作曲家であるフランソワ・ドゥヴィエンヌ (1759-1803) のフルート協奏曲におけるアーティキュレーション技法の諸相を考察し、そしてその特徴を抽出し、それが弁論にも匹敵するようなレトリック的な表現をもつものであることを明らかにしている。

第I章ではドゥヴィエンヌの伝記と作品の概要について述べた。ドゥヴィエンヌはパリ音楽院創立時のフルート科主任教授を務め、オペラや協奏曲をはじめ数多くの作品を発表・出版し、当時のパリでもっとも名声を得た音楽家の一人である。本稿で取り扱うフルートのための協奏曲作品は、その精力的な活動の中でライフワークのような位置を占めているが、ドゥヴィエンヌの激動の人生においてそれらが生み出された背景を探った。

第II章では、ドゥヴィエンヌ以前の18世紀のアーティキュレーションがどのようなものであったかについて述べた。18世紀のアーティキュレーションには非常に多様な側面が見られるが、総じてそれらは言葉を「語る」アーティキュレーションであった。ここでは主に、多彩なタンギング・シラブルが地域や年代でどのような変遷を遂げたかについて注目して論述している。

第III章ではドゥヴィエンヌの『フルートのための新しい理論的・実践的教則本』において、彼のフルート奏法に対する意識と、タンギングの技法がどのようなものであるかについて考察した。ドゥヴィエンヌの音楽には保守的な面と、革新的な面がバランスを保ちながら共存しており、その彼の音楽に対する考え方が、現代にまで続くフルートのフレンチ・スクールの源流であるということを示した。

第IV章ではドゥヴィエンヌの13曲の協奏曲について、構成、主題、和声の観点から分析を行い、これらの作品の特徴的な部分について論じている。

第V章では、ドゥヴィエンヌの協奏曲の大きな特徴の一つである、メカニックのセクションとアーティキュレーションの関係について述べた。メカニックのセクションは演奏者の技術を誇示するような、技巧的パッセージだけで構成されており、そこに第III章で見た『教則本』におけるさまざまなアーティキュレーションのパターンが応用される実例がどのようなものであるか、パターンごとに取り上げて論じた。

第VI章では、フルート協奏曲の主題におけるアーティキュレーションの果たす役割について論じている。主題に対するアーティキュレーションの実施は、主題がもつ性格をより明確にすることでコントラストを強調するが、時には中間的な性格をつくり出したり、さまざまな変化に富んだ表情を描き出したりすることも可能にしている。

最後に、第VII章ではドゥヴィエンヌのアーティキュレーションの技法が果たす、レトリックとしての役割について論じた。ドゥヴィエンヌの示したアーティキュレーションのパターンは、レトリックにおける文彩に例えることができ、それらは協奏曲の中で他の音楽的要素と結びつくことで劇的な演出の効果を生み出していることを明らかにした。

18世紀のアーティキュレーションはさまざまなタンギングによって音楽を「語る」技法であり、19世紀のアーティキュレーションは「描く」技法である。ドゥヴィエンヌのアーティキュレーションはその中間を埋めるような、両方の要素を含んでいると言える。ドゥヴィエンヌのアーティキュレーションは多数の聴衆に対して感覚的に語りかけ、訴え、伝えるための弁論術であり、それは18世紀末のフランスにおける過渡期的な音楽様式の一面を描き出しているのである。

# 審査結果の要旨

## ＜リサイタル審査＞

このリサイタルは、2014年12月17日（水）19時～20時15分の間、本学講堂にて下記のプログラム・内容で行われた。

### プログラム

- |                             |
|-----------------------------|
| F. ドゥヴィエンヌ：フルート協奏曲第9番       |
| F. ドゥヴィエンヌ：2本のフルートのための協奏交響曲 |
| A. ジョリヴェ：フルートと弦楽のための協奏曲     |

本リサイタルは申請者の学位論文《フランソワ・ドゥヴィエンヌのフルート協奏曲におけるアーティキュレーションの技法》（12月17日現在のタイトル）の主たるテーマである「ドゥヴィエンヌ作品における特徴的なアーティキュレーション」について、その主張を実践的な場で公に開示することを第一の目的として開催された。

18世紀後半パリに生きたフルート奏者ドゥヴィエンヌ（1759～1803）はパリ音楽院初代フルート科教授であり、作曲家でもある。リサイタル前半に演奏された曲目は、彼の《フルート協奏曲第9番ホ短調》及び《2本のフルートのための協奏交響曲ト長調》。

特筆すべきは、これまで総譜の存在しなかった《フルート協奏曲第9番ホ短調》において、唯一残された不完全な初版パート譜（パート毎に小節数が異なるなどの欠落、欠陥を伴う）を基に、申請者自身が検証修正したうえで総譜の形に仕上げ、初めて演奏できる形として整えたことだ。この作業により関係者が漸くこの楽曲の全貌をつかめることとなった意義は大きい。

さらに、リサイタル後半では、後にドゥヴィエンヌから数えて18人目のパリ音楽院フルート科教授となるジャン・ピエール・ランパルによって初演されたアンドレ・ジョリベ（彼も後に同学院教授となる）作曲《フルートと弦楽のための協奏曲》も演奏された。

時代は違えども、パリ音楽院のフルート奏者たちと縁浅からぬ「フルート協奏曲」が150年余の時を隔て、どのような変容を遂げたかを比較検証するという意味においても、申請者の意欲がうかがえるプログラミングといえよう。

卒業生と在学生を中心として編成されたオーケストラは、前半では1st ヴァイオリンと2nd ヴァイオリンが向かい合う古典的な両翼配置がとられ、ソロイストとともに立奏した。その効果ゆえか、オーケストラの各パート、通奏低音を奏するチェンバロ、フルートソロパートが立体的で興味深い響きのコントラストを作り出していた。

冒頭に奏された《フルート協奏曲第9番ホ短調》第1楽章 Allegro では、オーケストラの印象的な強弱対比のなかから、丁寧な発音、明瞭なアーティキュレーション、切れの良いシンコーションを奏するフルートソロが浮かび上がる。申請者の主張するところの、作曲者がレトリックとして仕掛けた「様々に変化するアーティキュレーション」がクリアに奏され、聴く者を飽きさせない。技巧的なパッセージでは一音一音の粒が立って、煌めく粒子が空間にちりばめられたかのような幻惑を覚える。

オーケストラも躍動感ある刻みでソロを際立たせるだけでなく、音を伸ばすのみのセクションにあってさえソロを支えるように十分な表情をつける。ソロもオーケストラも区別なく音楽の仲間たちが音と戯れる様子が、当時パリの重要な演奏会であったコンセールスピリチュエルも「このようなものであったに違いない」と思わせるものがあり、緻密な練習が重ねられたことを聞き取ることができた。

第2楽章 Adagio cantabile では、オーケストラ、フルートソロとともに抑制されたヴィブラートであればこそ、心にしみる歌を奏で、チェンバロの奏する即興的パッセージがフルートに効果的な

彩を添える。ここでも様々に展開されるアーティキュレーションの変化が聴き手の興味をつなぎとめることに貢献した。

第3楽章 *Allegretto con variazioni* は、親しみやすい民謡調のテーマによる変奏曲。「これでもか!」と言わんばかりに、細かな音符が華麗にちりばめられた変奏が次々に繰り出される。ときにトリッキーで変拍子であるかのように錯覚させるアーティキュレーションによる技巧も冴えわたり、聴くものを思わず前のめりにさせる効果を十分に発揮していた。

続く《2本のフルートのための協奏交響曲ト長調》は、2ndフルートに国際的に活躍する瀬尾和紀氏を迎えて演奏された。ここでは二人のソロイストのみならず、オーケストラのそれぞれの楽器においても、より明瞭なアーティキュレーションが浮かび上がり、両翼配置とも相まって文字通り「協奏交響」的な音世界を築き上げた。

第1楽章では、申請者は著名な奏者とも互角に渡り合えるだけのサウンドをアピールしつつ、ときに2ndフルートに寄り添い、ときに対抗して音楽を盛り上げる。

同時に、アーティキュレーションの変化による様々な試みだけではなく、劇的なダイナミックの変化による表現を施すなど、この時代の音楽が、それまでの限られた貴族階級のものから、一般民衆に支持を広げるために採用した方法論が、分かりやすく示されていた。

第2楽章は短い *Adagio* をはさみ、そのまま *Allegretto con grazia* へと進む。再び二人のソロイストが腕を競い合うかのように、入れ違いに互いの華麗なソロを聞かせたかと思えば、息の合った二重奏を奏でるなど、耳を飽きさせる暇を与えず聴く者を音の快楽の世界へと誘う。

「彩り豊かに変化する」としか形容できない様々な形のアーティキュレーションのありようは、申請者が提出しようとする論文の内容に沿ったものでもありながらも、ステージにおいては論文の枠を飛び越え、ドゥヴィエンヌの多面的な魅力を余すところなく披露する演奏となっていた。

第7番以外に、これまで演奏される機会の少なかったドゥヴィエンヌの他の協奏曲に光を当てた申請者の功績は、認められるべきものであろう。

後半のジョリベ作曲《フルートと弦楽のための協奏曲》では、オーケストラは下手から1stヴァイオリン、2ndヴァイオリン、上手に向かってヴィオラ、チェロ、コントラバスと一般的な配置に変わり、座席に座っての演奏となった。また、指揮者をおくなど、典型的な現代の「協奏曲」として演奏され、150年の隔たりが音楽にもたらした変化を視覚的にも演出して見せた。

冒頭 *Andante cantabile* では、神秘的なフルートの旋律を、古代世界へと誘うかのようにジョリベ特有の和声感を湛えた弦楽オーケストラが包み込む。それは儀式における唱和のようでもあり、独奏フルートの響きに強い意味性を付与する。申請者の演奏は楽曲自体が発するそうした要請に十分に応えるものであり、聴く者を困難なくジョリベの呪術的世界へと引き入れた。

続いて一転し、リズムカルな *Allegretto scherzand* の部分では独奏フルートが技巧的パッセージを交えながら、オーケストラとの躍動感あるリズムによる対話を繰り広げる。

続いて、緊張感ある *Largo* があたたかも悲歌であるかのように奏された後、再度高度な技巧が要求される *Allegro risoluto* に移り、この作曲家ならではの特徴的な響きによってフルートがスリリングなソロを展開する。最後はオーケストラとともに熱狂的な盛り上がりを見せて曲を締めくくった。

申請者は、現代のフルート奏者が求められる十分な技量を示すとともに、この作品の前衛的でありながらも、古典的な美を垣間見せる両義性を見事に描出した。今もフルート界に息づくドゥヴィエンヌに端を発するフレンチスクールの伝統を、誰もが納得しうるレベルで演奏表現することに成功していた。

以上、博士学位申請リサイタルとしてふさわしい内容であることを認め、審査員全員が一致して合格と判断した。

## <論文審査>

### 審査の方法

まず候補者が平成27年2月2日(月)午後12時半から約50分間、博士論文について公開発表を行い、その後約30分にわたってフロアからの質問に答えた。

14時からの本審査では、候補者が予備審査において指摘された点に関する加筆・修正箇所について説明を行なった。次に3名の審査委員から、口頭試問が約40分行なわれた。試験終了後、試験委員の合議により、合否を判定した。

### 審査の内容

本論文はパリ音楽院の初代フルート科教授で、フルート奏者・作曲家のフランソワ・ドゥヴィエンヌのフルート協奏曲におけるアーティキュレーションを扱った意欲的な論文である。ドゥヴィエンヌに関する研究は世界的に見てもきわめて稀であり、総譜もなく、参考となる書籍や資料がきわめて限られているなかで、これだけの論考をまとめたことは高く評価される。

本論文では、まずドゥヴィエンヌの生涯と作品について概説し、はじめての横吹きフルートのための教則本であるオトテールの『フルート教則本』などの代表的な教則本を通して、ドゥヴィエンヌ以前のアーティキュレーションについて、言葉を話すような演奏のあり方と結びつけて論じた。そしてドゥヴィエンヌ自身の『フルートのための新しい理論的・実践的教則本』をとりあげ、そのタンギングとアーティキュレーションの技法について、基本的に18世紀的な伝統に立脚しながらも、19世紀への橋渡しをするな様式をあらわすものであることを論じた。

論文のテーマであるフルート協奏曲については全13曲をとりあげ、そのかならずしも標準的とはいえない形式の分析を行ったうえで、技巧上の特徴とアーティキュレーションについて、また主題の性格づけにアーティキュレーションが深く関わっていることを論じた。そしてそうしたドゥヴィエンヌのアーティキュレーションが文章表現における修辞に似た性格を持つものであるとして、アーティキュレーションの文彩について、1「流れ」と「輝かしさ」、2反復、3強調、4対比、5換言、6誇張という6つの性格に分けて論じた。そうしたうえで、こうした性格づけは音楽に劇的ともいえる演出効果をもたらすものであり、ドゥヴィエンヌのアーティキュレーションは音楽におけるいわば弁論の技術とも言えるものであると結論づけた。

このようにドゥヴィエンヌの『教則本』をもとに、フルート協奏曲のアーティキュレーションを通じて、ドゥヴィエンヌの独自性と歴史的な位置を明らかにした意義は大きい。またパート譜から総譜を制作し、ドゥヴィエンヌの『教則本』をみずから翻訳した努力は大いに評価できる。予備審査の段階で指摘した点もすべて改善されており、審査員全員一致で合格と判断した。